No Borders
哀歌
Richie Beirach Trio
リッチー・バイラーク・トリオ

1. 子供の情景～作品15#1
Scenes From Childhood-op15 #1 《Schumann》(5 : 44)

2. 悲愁～ピアノ・ソナタ・第3楽ハ短調第2楽章
Pathetique < minor slow movement 《Beethoven》(6 : 56)

3. グノエンヌ第1番
Gnossiene #1, f minor 《Satie》(5 : 08)

4. パバーヌ
Pavane-g minor 《Faure》(5 : 35)

5. 雪の上の足跡*
Footprints In The Snow~ Prelude for Piano Bk. 1- #6 d minor 《Debussy》(7 : 38)

6. シシリアーノ
Siciliano -g minor 《Bach》(4 : 10)

7. 哀歌～内なる印象第1番
Impressions Intimas - #1 a minor 《Mompou》(8 : 04)

8. 前奏曲第4番ホ短調
Prelude For Piano -#4 e minor 《Chopin》(7 : 47)*

9. スティール・プレイヤーズ（9月11日のパラード）*
Steel Prayers - Ballad for 9/11 WTC. 《R. Beirach》(5 : 22)

リッチー・バイラーク Richie Beirach 《piano》
ジョージ・ムラツ George Mraz 《bass》
ビリー・ハート Billy Hart 《drums》
ゲスト：
グレゴール・ヒューブナー Gregor Huebner 《violin》*

録音：2002年5月7,8日　ニューヨーク

＊

Produced by Tetsuo Hara And Todd Barkan.
Recorded at "The Studio" in New York on May 7 and 8 , 2002.
Engineered by Katherine Miller , Assistant Engineer by Eiji Takasugi.
Technical Coordinator by Derek Kwan.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara .
Cover Art : "The Persistent Sea No.2"
O. Louis Guglielmi by PPS Pacfic Press Service.
Artist Photo by Karen Tweedy-Holmes
Liner Notes : Richie Beirach.
Richie Beirach is a Steinway Artist. Designed by Taz.

リッチー・バイラークは、多彩な表情をもっているジャズ・ピアニストである。あふれんばかりのロマンを感じさせる、メロディックな美しいプレイをおこなってみせたかと思うと、つぎの瞬間には大胆かつ探求心にあふれた、冒険的なタッチを鋭いひらめて、聞く人々を驚かせる。フォーマットの面からみても、ピアノ・トリオだけでなく、ソロ・ピアノ、あるいはかつてデイブ・リーブマンと一緒に編成していた“クエスト”のようなコンボから、さまざまな楽器とのデュオ、あるいは変則的な編成の中ほど、彼の演奏する音はさまざまだが、とりもなおさずそれはバイラークというミュージシャンが、きわめて自由かつ幅広い音楽的な視野をもっているからにほかならない。そんなリッチー・バイラークが、ことに興味をもって意欲的にとり組んできたのが、クラシック音楽を素材にしながら即興プレイの可能性を追求してゆくようなことだった。バイラークは1991年に、クラシックの名曲を中心にとりあげて、ソロ・ピアノによる即興プレイをおこなった「Themes and Impromptu Variations」をリリースしているし、最近ではバルトークやこのアルバムでもとりあげられているスペインの作曲家、フェデリコ・モンポウの作品ばかりを演奏したアルバムもレコーディングしている。だからリッチー・バイラークがクラシックのナンバーばかりを演奏するのは、単なるアルバムのための企画というよりは、いつも彼の心の中で暖められているアイディアのひとつなのである。

もともとリッチー・バイラークは、ジャズの世界に足を踏み入れるずっと前から、クラシック・ピアノのテクニックをみっちり身につけていたミュージシャンだった。1947年5月、ニューヨークのブルックリンに生まれたバイラークがピアノの練習をはじめるようになったのはおよそのときで、以来10数年間にわたって徹底レッスンを受けて、あらゆるクラシック音楽の表現やテクニックを学んでいきている。その範囲はシューマンやショパンのようなロマン派の作品ばかりでなく、バッハなどの古典からシェーンベルク、ベルク、ウェーベルンといった20世紀の現代音楽までの、あらゆる範囲にまで及ぶ。言ってみればバイラークは、音楽における大胆な冒険といったものも、クラシック音楽の手法をとおして学びとってきたのであって、“抒情”と“革新性”というこ、ともすれば相反するようにもみえる彼の多面的な表現要素は、このようにクラシック音楽をみっちりやってきたということと、けっして無関係ではないように思われる。そんなリッチー・バイラークがピアノ・トリオというフォーマットの中で、あるためてクラシックのナンバーをとりあげて、彼ならのやり方で表現してみたのが、この最新作である。

ここでリッチー・バイラークは、きわめて美しいメロディーをもっているクラシック・ナンバーばかりを選んで、オーソドックスなピアノ・トリオというフォーマットで演奏してみせる。それらの中には、いままでに彼がソロ・ピアノなどでレコーディングしてきたナンバーもいくつか含まれているけれども、ここでのピアノ・トリオによるアプローチの方法は、じつに独特だ。ピアノ・トリオというフォーマットをつきつめながら、いままでのソロ・ピアノ演奏などとはまた違ったテイストを出してゆこうとする、意欲的なバイラークの姿がそこにある。バイラークは曲の奥にまで分け入って、どのような方法をとるべきかを模索しながら、すべての曲のアレンジを彼自身でおこなってみせているのだ。その中には原曲のもっている味わいを生かしきったものもあるし、即興演奏の素材として、かなり意識的にイメージを変えた解釈で演奏しているものもある。いずれにせよ、あちこちの部分にリッチー・バイラークというミュージシャンがもっている、本質的な意味での抒情性と冒険性が綱をのぞかせているのが、じつに興味深いところだ。名曲のジャズ化というと、もとのメロディーやハーモニーの美しいものが多いだけに、どうしてもその美しさに寄りかかりがちになる。結果としてクラシック・メロディーの上っ面だけを借りた、安易な演奏になってしまうものが多く見受けられるなかで、バイラークはあくまで作品の本質を探りながら、ジャズ・ピアニストとして、トリオによる表現を探求してみせるのだ。その掘り下げの深さや、個性の投入の鮮やかさといった点においてもこの音楽は、今日のファッションのようにさえなっている、安易なクラシック作品のジャズ化とは一線を画している。

その良い例が、アルバム・タイトルになっている＜哀歌～内なる印象　第一番＞である。スペインのパルセロナに生まれた作曲家のフェデリコ・モンポウ。おだやかな響きをたたえたピアノ曲を多くのこしたモンポウが20世紀のはじめ、まだ20才前という若さで書いたのが、この＜哀歌＞。リッチー・バイラークは、前述の「Themes and Impromptu Variations」や、2001年のアルバム「ラウンド・アバウト・フェデリコ・モンポウ」のなかでも、この曲をとりあげて演奏していたけれども、ピアノ、ベース、ドラムスというオーソドックスなトリオ編成で演奏されるのは、今回が初めてである。ヴァイオリンによって抒情的なメロディーが奏でられていた「ラウンド・アバウト・フェデリコ・モンポウ」での演奏に比べると、ピアノがぐっと前面に押し出された演奏。“ピアノを中軸に置いて、もういちどこの曲をレコーディングしてみたかった”とバイラーク自身が言っているように、ここでは演奏自体も倍近くの長さになり、彼のピアノが切々と哀しみを歌いあげてゆく。これに呼応するベースのムラツと、ドラマー、ビリー・ハートとのインタープレイの鮮やかさ！　3つの感情が混じりあうことによって、音楽がいっそう激情的な昂ぶりをみせてゆく。早なるピアノ・トリオの枠を超えたピアノ・トリオ音楽であり、そのドラマティックな展開にはまさに圧倒される。バイラークは過去に、モンポウの“密やかな音楽　第一番”をとりあげていたことからもわかるように、とりわけこの作曲家への愛着が強いようだ。そんなリッチー・バイラークの思い入れとともに、まさにこの＜哀歌＞はタイトル曲にふさわしい、アルバム中でも白眉といえるトラックになっている。

アルバムのトップに収められているのは、シューマンによって書かれた名ピアノ曲＜子供の情景＞で、全部で13のパートからなっている作品のうち、一曲目の“見知らぬ国から”を選ばれたメロディーがとりあげられている。幻想的なテーマに続いていきなり現れるムラツのベース・ソロは、一瞬だがあのビル・エヴァンス～スコット・ラファロの鮮やかなインタープレイを想いおこさせるものがある。単にロマンティックなだけでなく、後半にムードをがらりと変えて、ハードなトリオ演奏へと移ってゆくあたりも聞きもの。つづく＜悲愁＞は、ベートーヴェンのおなじみのピアノ・ソナタの第２楽章。沈んだ感じのイントロから、リリカルなテーマ・メロディーが、ゆったりしたテンポで奏でられている。ひとつひとつのフレーズを歌うようなバイラークのピアノ・ソロに、ビリー・ハートのドラムスがホットなアクセントをつけ加えてゆく。＜グノシェンス＞は、エリック・サティが書いたオリジナリティあふれるナンバーの中でも、もっとも親しまれている一曲。これもバイラークがしばしば演奏していたものだが、ここではクラシカルな出だしから一転してアップ・テンポのスインギーなビートへと変化するチェンジ・オブ・ペースが面白い。フォーレの＜パヴァーヌ＞は、ビル・エヴァンスのヴァーグ盤「ウィズ・シンフォニー・オーケストラ」の中でもとりあげられていた曲。優雅な雰囲気をもつ原曲のもち味をいっそう生かした、バイラークのピアノ・タッチが心うに美しく、アルバムのなかでも強い印象をのこす演奏になっている。

＜雪の上の足跡＞は、クロード・ドビュッシーによる印象派ピアノ曲の傑作「前奏曲　第一巻」の中の曲。ほとんどがピアニッシモ以下で演奏されるという静寂の世界を、ここではグレゴール・ヒューブナーのヴァイオリンを加えて、淡々と表現してみせる。バイラークは96年のアルバム「スノウ・レパード」でゲストに迎えて以来、ヒューブナーとはしばしば共演をおこなっ、音楽的なアイディアも交換しあってきた仲である。美しいヴァイオリンの響きによって、ハーモニーの中に色彩を追求していたドビュッシーのスピリットが、今日によみがえっている。バッハの＜シシリアーノ＞では、クラシカルな出だしから、軽妙で自然なスイングへと移ってゆくあたりが、じつに心地よい。ショパンの＜前奏曲　第4番＞は、バリトン・サックスのジェリー・マリガンがマーキュリー盤「ナイト・ライツ」の中で演奏して、ジャズのスタンダードとしてもポピュラーなものになった。最近では、やはりピアニストのマル・ウォルドロンなども吹き込んでいたが、ここでは詩半、ショパンの甘い抒情性を拒否するかのように、ジャズ的なスリルにあふれたハード・ドライヴィングなトリオ演奏が鳴りひろげられてゆくのが面白い。ラストの＜スティール・プレイヤーズ＞では、リッチー・バイラークの作品。“9月11日のパラード”にサブ・タイトルがつけられているように、アメリカ中が悲しみに沈んだテロ事件でこうむった人々への深い哀悼の気持ちが、ムラツのアルコ・ベースや、ヒューブナーによって奏でられるヴァイオリンの調べに強く表れている。

岡崎　正通